

漂泊のアイデンティティ

——周作人の立教大学訪問時における新史料から—— 鳥谷まゆみ

はじめに

本稿は、周作人の日本憧憬を研究対象に、一九四一年四月の立教大学訪問に関する新史料への考察を通じて、淪陷期における彼の複雑な心情の一面に迫る試みである。一九三七年の日中戦争勃発後、多くの知識人が戦禍を避けて南下するなか、周作人は日本占領下の北京に留まり、結果的に「対日協力」を行った。しかしながら所謂「淪陷期」と称される日本占領期の彼の行動や思想の全貌は今日においても十分に明らかになっていない。それは非日常の極みとも言える戦争に端を発し、一九四〇年代初頭に「漢奸」文人として認定された彼の日記が限定的にしか公開されていない



いことも関係していよう。最近、一九三九年、一九四九年の日記が立て続けに公開され、また二〇一八年夏に世界で初めての国際シンポジウムが東京で開催されるなど、こうした動向は周作人研究における新局面の到来を予兆させるが、いずれも限定的であると言わざるを得ない。管見の限り、既存の年譜や先行研究なども淪陷期部分については曖昧な記述に留まるか、すつぽりと抜け落ちている。とりわけ、一九四一年春の来日時に関する周作人の行動は不明な部分が多い。

そもそも周作人は淪陷期に多くを語ろうとしなかった。この「沈黙」の理由は何なのか。それは恐らく淪陷区において中国人が公に真意を語ること、すなわち表現することの難しさを彼が十分に理解していたからだろう。周作人は

一九三八年二月に書いた読書筆記『東山談苑』を読む」において、倪元鎮が辱めを受けながらも終始口を噤んでいた理由を問われて、「口を利くだけ俗だ」と述べた箇所を引いて、「この言や殊に好し」と評価した。沈黙は反政治主義的な彼の審美観に適った方法であったとも考えられるが、淪陷区という複雑な社会体制に鑑みれば、それは生きのびるためのひとつの選択であり、態度ではなかっただろうか。沈黙は占領区に生きる人々に普遍的に見られる行為であった。

周作人が他と異なるのは淪陷区北京で一九四一年一月に閣僚級の要職に就いたことだろう。「華北政務委員会教育総署督弁」（以下教育督弁に統一）の就任によって、周作人はより一層注目されるようになり、彼の置かれた状況は他の留京知識人とは至極異なるものとなった。周作人の教育督弁就任は、その前年の冬に前教育督弁の湯爾和（一八七八―一九四〇）が逝去したのを受け、当時、「偽」北京大学文学学院院长をしていた周作人が方々からの求めに応じて、その後任として出馬したことに端を発する。この就任によって彼の「対日協力」は決定的となり、のちの日本敗戦後に開かれた国民政府の裁判で有罪判決を受けて投獄されるに至るわけだが、教育督弁就任は彼に一層強い緊張を強いたに違いない。このような特異な状況は、彼をしてより意識的に沈黙を選択させたのではないだろうか。それは

人々に周作人本来の姿を不分明に映らせると同時に、時に彼を自意識の混迷に陥らせることもあったと考えられる。仮に全く無自覚な沈黙であったとしても、少なくともその時代を生きるために周作人という人物が必要とした行為であった。こうして彼は非日常の極まる北京で「沈黙」を選択し、不透明な自分を生きた。

周作人は如何なる思想や感情を抱いて行動し、淪陷期を生きたのだろうか。このような問いに関する先行研究に、木山英雄『周作人〈対日協力〉の顛末——補注』北京苦住庵記』ならびに後日編』がある。木山は周作人と同時代人からの直話を含む大量の史料と周作人テクストへの分析を通じて、淪陷期におけるその思想歴を浮き上がらせた。本稿も木山の論考から多くの示唆を得たが、本稿では淪陷期の体系的な周作人についてではなく、彼の日本への公式訪問という局所的な事象を取り上げて考察を加える。具体的には一九四一年四月、周作人の立教大学訪問に焦点を当て、関連する新史料への分析を通じて訪問の背景や詳細を明らかにし、そこから彼の心情に迫る。非日常のなかで自らが必要とした「沈黙」だったとしても、憧憬の念を抱く日本の訪問によって素直な心情が表出する瞬間もあったのではないか、このような問題意識のもと、本稿では周作人の公的行為に垣間見える私的な側面を掬いあげ、さらに両者の交錯部分から彼の心情を窺うことを試みる。調査途中

かつ発展途上の研究ではあるが、現時点までに明らかになったことを可能な限り本稿で提示することにより、周作人研究の小さな一面を補えればと思う。⁽⁵⁾

一 「文人督弁」の日本訪問

一九四一年四月の日本再訪は、一九一一年に東京留学から帰国後、周作人にとって三度目の訪日であった。一九一九年は日向にある新しき村訪問のため、一九三四年は親族訪問のためという私的な訪日であった。三度目は一九四一年一月に「華北政務委員会」教育督弁に就任したことから、その就任の挨拶を兼ねて「東亜文化協議会」評議員代表団の一員として、錢稻孫ら六名とともに東亜文化協議会文学部会に出席するための公式訪問であり、これまでとは訪日の目的も身分も全く異なっていた。文学部会は京都と東京の二箇所で開催され、全七日間の旅程であった。文学部会への参加のほか、両地に住む日本人の訪問や会食などの予定が来日前に組まれていた。来日直前の三月二十六日、長年来の付き合いがあり当時、東京在住であった方紀生に寄こした周作人の手紙には、「残念ながら多分ゆつくり話しをする暇はないでせう」とある。彼の滞日中の詳細について、既存の周作人研究資料や年譜にも若干の記載はあるものの、正確さを欠いている。本稿では日本発行の新聞の

ほか、新史料などを参照しつつ、時系列に沿って記すこととする（次頁表参照）。

周作人の動静について、日本の新聞メディアがその来日前後に一斉に報じている。『朝日新聞』東京版もその時期に集中的に周作人を報じた一紙である。関連記事の見出しを列挙すると、「『中國文學の父』来る」（一九四一年四月一〇日）、「日本と合作で中國を教化——周氏文化維新を語る」（同一五日）、「中國文壇の巨星入京」（同一五日）、「周氏、白衣勇士を慰問す」（同一七日）、「日支文人、春の清談——周作人氏を圍むひととき」（同一八日）、「周作人氏帰國の途へ」（同一九日）などがある。また『読売新聞』の「新中國文化の父 周作人氏らけふ入京」（同一五日）という見出しの記事には、信子夫人とのツーショット写真も掲載されている。ここからは日本での周作人に対する愛着を含んだ関心の高さとその歓迎ぶりを窺うことができよう。

日本の文化人たちもその日本訪問を心から喜んだようである。四月一七日には東京の星ヶ丘茶寮で日本ペン倶楽部の島崎藤村主催による周作人を囲んでの文芸座談会が開かれた。その模様は翌日刊行の『朝日新聞』東京版に早速写真付きで報道されている。記事によれば参加者は、有島生馬、菊池寛、佐藤春夫、志賀直哉、谷川徹三、豊島与志雄、島崎藤村、堀口大学、武者小路実篤、里見淳の一名

周作人の訪日日程（1941年4月）

7日		東亜文化協議会評議員代表団一行とともに日商船あるぜんちな丸で大連港を出港
9日	午前	門司港到着→13:00 神戸港に向けて出港
10日	午前	神戸港到着→移動→京都到着
	正午	京都市長加賀谷〔朝蔵〕主催の昼食会に出席
	午後	明治天皇桃山御陵を参拝、京都帝国大学に総長羽田〔亨〕を訪問
11日	午前・午後	京都帝国大学を参観後、東亜文化協議会文学部会に出席（京都帝国大学）
	晩	京都帝国大学総長羽田主催の晩餐会に出席
12日	午前・午後	開催の東亜文化協議会文学部会、懇親会に出席（京都帝国大学）
13日	午前	9:00 銭稻孫「劉」「奥田」「小川」らと汽車で奈良観光へ
	午後	東大寺、春日神社を参拝
14日	午前	8:45 東京駅到着、10:00「参内記帳」後、大宮御所へ秩父宮を訪問→明治神宮、靖国神社を参拝 ※帝国ホテルに投宿
	正午	文部大臣橋田〔邦彦〕主催の昼食会に出席（文部大臣官邸）
	午後	日本側主催「東亜文化協議会続編」に出席（学生会館）→16:30 帝国ホテルにて記者会見→17:00 湯爾和博士追悼会に出席、弔辞を述べる（学生会館）
15日	午前	興亜院文化部長松村〔森〕・内閣興亜院海軍各省を訪問、外務文部陸軍各省を訪問
	午後	神田の日華学会赤間〔信義〕総務部長を訪問
16日	午前	湯島聖堂を参拝→10:30 東京第一陸軍病院（新宿区戸山）にて傷病軍人を慰問、金一封を贈呈
	午後	14:20 池袋の立教大学を参観、講演 金一封を贈呈→16:00 東亜文化協議会理事会に出席（学生会館）
17日	午前	横須賀海軍病院にて傷病軍人を慰問、金一封を贈呈
	午後	東京に戻る 日本ペン倶楽部島崎藤村主催の座談会に出席（星ヶ丘茶寮）
18日	午前	〔田中〕〔勇男〕等が訪問→11:00 方紀生と工芸店へ買い物、琉球徳利を購入→柳〔宗悦?〕式場〔隆三郎?〕と会う→ホテルに戻る
	午後	〔小川〕とともに興亜院へ〔及川〕を訪問→数名と駅へ→14:10 出発→16:30 熱海到着 ※熱海ホテルに投宿
	晩	銭稻孫とともに赤間〔信義〕〔奥田〕を招飲→22:30 散会
19日		周作人一行離京、帰国の途へ
22日	晩	北京到着

注：「」は原文を、〔〕および※は筆者による注釈を表す。

の著名作家、それと、周作人のほか、錢稻孫、方紀生、尤炳圻の三名の中国人であった。長年来周作人を師と慕った方紀生（一九〇八一—一九八三）は、のちに周作人の還暦を祝して『周作人先生のこと』（光風館、一九四四年）と題する周作人専門の評論集を東京で編集・出版するが、同書への寄稿者の大半が座談会の参会者であり、同書の冒頭部分には『朝日新聞』と同じ写真も掲載されている。収録文章の大半が一九四一年の初出であることから、周作人の日本への公式訪問が当時の日本で如何に注目を集めていたかが窺える。

同書の寄稿者には、文部省から出向していた白井亨一（一九〇九—一九七一）と加藤将之（一九〇一—一九七五）という日本人官吏も含まれる。編者の方紀生は「華北駐日留学生監督」として東京牛込に事務所を構えていたの日本人官吏にも顔が利いたのだろう。さて白井によれば、教育督弁就任後、周作人は会う人ごとに、「畑違ひの仕事を抑せつかつて止むなくお引き受けしたが、若し不適任なる事情が判明すればいつでも職を辞する用意がある」と語っていたという。周作人は教育督弁就任が「畑違ひ」と自認したうえで、それを隠そうとはしなかった。いっぽう、占領側の日本もそれを承知していたからこそ、周作人のそのような発言を等閑視していたのだろう。加藤も、「格別私としては督辦の政治的手腕とかいつたものに觸れ

得たといふわけでもない」と率直な感想を述べている。さらに周作人を「文人督弁」と呼んで、その存在自体を「好ましいもの、うれしいもの」と感じていた。

「文人督弁」とは当時、新聞でもわりとよく用いられた周作人の別称である。すでに議論されているように、当時の陥落区では、文化こそ個々人の「内面を動員」しえる工具として見なされ、文化と政治は一体視されていた。相反する身分の組み合わせから成る「文人督弁」という用語は、まさにこうした時局を象徴していよう。それは同時に周作人の身分の二面性を含意する。つまり、教育督弁に就任した彼の文学家としての身分は、ある程度保障されていたのではないだろうか。前出の新聞記事の見出しでも、政治家としてではなく、周作人の文学家としての側面に焦点が当てられていた。日本滞在中の旅程を一瞥すれば、文学部会への参会のほか、興亜院や陸軍、各省庁への挨拶回りや神社参拝、記者会見の開催などの公式行事の合間に、文芸座談会への参会（一七日）や奈良観光（二三日）、熱海旅行のほか、意気投合したのだろうか、旅先での小宴（一八日）も見られる。恐らく、周作人は「文人督弁」としての挨拶回りや会議を熟しさえすれば、他はわりと自由に活動しえたのだろう。こうして約二週間に及ぶ日本の公式訪問を終え北京に戻った。では立教大学訪問は周作人にとつてどのような意味を有していたのだろうか。次節ではその

訪問の詳細を明らかにする。

二 立教大学訪問時の周作人

周作人と立教大学との関係と言えば、青年期に彼がここでギリシャ語を学んだことを連想する人が多いだろう。「ギリシャ語を学ぶ」という回想文のなかで周作人は立教大学での思い出を綴っており、関連の研究も少なくない。しかし管見の限り、周作人の立教大学訪問に関する記事や先行研究はほとんど見当たらない。そこで本節では写真や含む新史料を分析することによって、一九四一年の立教大学訪問およびその前後の詳細を明らかにしたい。

四月一六日午後二時過ぎ、周作人は立教大学に到着した。彼の立教大学訪問は、午前湯島聖堂の参拝、第一陸軍病院慰問を経て昼食をとった直後に行われ、夕方には東亜文化協議会の会議も控えていた。かようにも過密スケジュールのなか、一九一八年に築地から池袋に移転していた立教大学の校舎を訪問したのだった。大学到着時の様子は、『立教学院学报』（以下『学报』に統一）掲載の「ようこそ先輩 周作人氏本學來訪」と題する記事から窺うことができる。以下に冒頭の箇所を引く。

四月十四日東亜文化協議會出席のため來朝した華北教育

總署督辦周作人氏は多忙な滞京スケジュールの一部をさいて訪日の挨拶かたがた視察を兼ねて十六日嘗ての母校立教大學を訪れ午後のひとときを過した、この日午後二時半、一臺の自動車に砂利をきしませて本學本館前に停まつた、中から降り立つた中國の一紳士、丸刈に黒の支那服、何處か大陸人らしいおつとりした風貌、キラリと光る近視鏡の奥に憂愁を帯びた眼が澄んでいる、周作人氏である。

『学报』の記事に見える大学到着時の周作人は、あたかも物語の主人公の登場を思わせる。細部がユーモラスに生き生きと描写され、その筆致からは記者の周作人に向けられる愛着を読み取ることができよう。この『学报』だが、大正時代にも同名の雑誌が発刊されていたようである。ここで取り上げるのは一九四〇年発刊の学报で、誌名からも学院当局の広報誌という位置づけであったと考えられるが、同時に学生が執筆編集を務めるという校内新聞の色彩を持つていた。恐らく引用の記事も学生記者の手によるものであろう。引用の続きには、出迎えた遠山校長と周作人が挨拶を交わし、直ちに総長室で小休止した後、総長の案内で図書館、研究室等を参観、さらに校庭を横切つて予科棟の三一教室に入り、そこで教室いっぱい学生有志に歓迎えられ、学部三年の中村淳郎君の歓迎の言葉を受けて講



「豫科ヘ向カフ一行」(「其ノ一」より) (左) 「豫科カラー号館ヘ」(「其二」より) (右)

演を行った、と訪問時の様子が克明に記されている。従来、周作人研究において『学報』の記事が取り上げられたことはないが、来日時の足跡を記した史料として注目できよう。遠山郁三校長の日記も周作人の立教大学訪問時の様子を窺う史料として参照できる。「四月十六日 午後1 P.M 課長会。全員出席。諸報告。周作人氏午後二時二十分来学。七里(理ニ筆者注)氏案内。図書館、研究室、予科に案内し、諸印刷物を贈呈し、三〇一(三一)番教室にて学生代表に対し、曾禰予科長司会、遠山紹介、周氏挨拶あり。その後三時四十分まで記念館に歓迎茶話会を開く。参会者約六十五名あり」と記されており、『学報』の内容とほぼ一致する。

遠山日誌から周作人の立教大学滞在は約八〇分であったことがわかる。一六時には東亜文化協議会の理事会も予定されていた。だがかようにも短い時間内に、彼は本当に日記記載の場所全てに足を運んだのだろうか。今回筆者が発見した周作人の立教大学訪問時の白黒写真は合計九枚、いづれも無題・無記名の一冊のアルバム内に貼られて立教大学院史料センターに保管されていた。なお、本来誰の所有物であったかは不明である。さてこの九枚の写真をそれぞれ検証してみると、特定できなかった研究室を除いて、その他全ての場所が写っていることが判明した。したがって彼は実際に全ての場所に行った、と結論できよう。周作人



「名刺ヲ交換スル松下教授」(「其四」より) (中央が松下教授)

の立教大学訪問はまさに分刻みのスケジュールだったと推察されるが、そのことは同時に直前に訪問が決まったことを示唆する。では結局周作人の立教大学訪問は公式だったのだろうか、あるいはそうではなかったのか。

「學長室ニ於ケル周作人氏」との見出しがつけられた写真には、次のような説明も附される。「昭和十六年四月十六日 華北政務委員會教育總署督辦校友周作人氏 母校訪問ノ形式デ來校」。「教育總署督辦」と「校友」という異なる身分が並列している点は注目できよう。立教大学にとって、中国出身の校友でもある政治家の訪問を受けることは名誉であると同時に、対外宣伝にもなりえたはずである。周作人の歓迎茶話会に六五名もの参会者がいたのも、事前に遠山校長が招待状を発送して

いたからであった。今回筆者が発見した史料には、遠山校長名義で四月一四日に発行された一枚の招待状が含まれる。そこでは歓迎茶話会の開始時刻は「二時」となっているが、遠山日誌によると周作人が実際に到着したのは「二時二十分」であったという。「名刺ヲ交換スル松下教授」という見出しがついた写真には、周作人と松下教授以外に名刺を交換するために列をなす数名の参会者が映り込んでいる。そのなかには当時の豊島区長池園哲太郎の姿も見える。なお、校友会名簿を調べたところ、池園も立教大学の校友であることが判明した。これらの史料は、周作人の立教大学訪問確定後に、大学側が歓迎茶話会の招待状を、校友を含む学外者に発送したことを示唆する。招待状の発行情日は「四月一四日」であるので、招待状は周作人が九日の日本到着、もしくは一四日の東京到着の後に発送されたと考えられる。つまり、周作人の東京到着直前まで時間等の調整がなされたわけであり、彼の大学訪問が流動的であったことがわかる。それは両者の意向の一致、とりわけ周作人の意向無しには成立しえなかった。

周作人の立教大学訪問時の写真には、遠山校長のほかにも経済学科の根岸由太郎、立教学院牧師の高松孝治らといった当時著名な教授陣も見える。もう一人、常に周作人と校長の傍らにいる上髭を生やした、扇子を手にする人物が注意を引く。その人物こそ経済学科講師の七理重恵であ

る。一六日の遠山日誌にも「七理氏案内」と記録されていることから、彼が中国に精通しており、周作人の立教大学訪問に少なからず関与していたと推察される。次節では周作人の立教大学訪問の背景について明らかにする。

三 訪問の背景

——『遠山郁三日誌』、上住昇平の回想から

一九四一年四月九日の遠山日誌によると、この日、周作人から一本の電報が届いたという。該当箇所を次にそのまま引用する。

校友周作人（華北政務委員会、教育総署督弁）就任挨拶及東亜文化協議会出席のため来朝を機とし、其暇を利用して、一六日午後二時半より四十分間来学の来電あり。交渉は七里〔理〕と前島〔潔〕氏に当る。⁽¹⁸⁾

この電報がいつ、どこから送られたのかは知る術がない。だが九日の門司港到着時に周作人が誰かに依頼して送ってもらえば当日中に届いたはずである。当時、電報取次駅や郵便局から電報を送ることは一般的であった。さて日誌に見える「七理講師」とは七理重恵のこと。七理は確かに周作人の立教大学訪問と関係していた。周作人日記を調べて

みると、立教学院チャプレンの前島潔と七理の両名は、一九四一年より以前に周作人と面識を結んでいた。七理は一九三四年七月に周作人夫婦の滞在先であった東京本郷で、前島は一九三九年八月の中国視察時に北京周家で周作人と会っていたのである。⁽¹⁹⁾その後再会することはなかったように、彼らがどのように周作人と交渉したのかは不明だが、両名とも初対面時に仲介者がいたことに鑑みれば、今回の訪問に関しても同様の可能性が高い。

ほかに、校友の上住昇平（一九一九—？）の回想も注目しに値しよう。上住は晩年、立教学院文書館研究員のインタビューを受けた際、大学生活を回想するなかで周作人の立教大学訪問についても言及している。上住の回想によれば、当時自身が主事する「海外事情研究会」とその顧問の七理先生が周作人訪問に直接関わったという。研究会の前身は「支那研究会」と言い、同会は一九四一年、「支那語科」⁽²⁰⁾の上住を中心にクラスメイトとともに設立された。その主たる活動は学内外の中国人留学生との交流であった。もともと上住は大学入学時から中国人留学生との交流を開始したそうだが、これは彼の中国との縁深い経歴が関係しているよう。日本に戦雲が垂れ込めるなか、支那研究会はアメリカ研究会など複数の研究会と統合されて「海外事情研究会」と名称を変えた。その部長が松下正寿（一九〇一—一九八六）教授であり、顧問が七理重恵（一八八七—

立教大学		
日丁三教池馬島邑市京東		
(電話) 〇四〇〇 〇四〇〇 〇四〇〇 〇四〇〇		
(電報掛) 〇四〇〇		
設立 〇四〇〇		
〇四〇〇		
姓	名	原
周	作人	法政大学豫科
陳	樹仁	法政大学豫科
廖	天祥	法政大学豫科
朱	建民	法政大学豫科
楊	建平	法政大学豫科
鄭	里鎮	法政大学豫科
郝	奎秀	法政大学豫科
陳	燦章	法政大学豫科
余	惠雲	法政大学豫科
紹	沈公	法政大学豫科
吳	頌	法政大学豫科
周	維	法政大学豫科
陳	恒	法政大学豫科

立教大学所蔵
「留日中國學生名簿送付方依頼ノ件回答」

一九六五) 講師と台湾出身の陳文彬(一八八七—一九六五) 講師であった。七理・陳の両名は中国語の教員であり、中国に精通し広い人脈を有していたという。七理については本節の後半部分で詳述する。

ほぼ同時期に、大学側も周作人招聘の方法を模索した。その直接的な契機として、周作人の日本訪問の前年に「立教大学々長」宛に届いた公式書簡「留日中國學生名簿送付方依頼ノ件」が関係すると考えられる。当該書簡は、「支那派遣軍總參謀長」板垣征四郎(一八八五—一九四八) 名義で発行されたもので、立教大学に在籍したことがある中国人学生全ての情報を「至急」提供せよというものであつ

た。この請求を受け、大学の関係部門は直ちにその時点までに在籍した中国人留学生二名の一覧表を作成し、それを大学のレターヘッドに記載して「回答」として報告した。名簿の筆頭を飾るのが周作人である。

「氏名」周作人／「卒業年度」—／「専攻学科」—／「出身校」法政大学豫科／「原籍」浙江省紹興府稽日縣／「其他参考事項」明治四十二年四月十日入学 明治四十四年四月十八日退学。

「回答」書の内容について、立教大学教務部所蔵の学籍簿と照合すると、例えば学籍簿の「入学前」という項目に、「明治四十二(一九〇八)年七月法政大學清國留學生予科修了」とあり、両者の内容は一致する。このように遠山校長は周作人来日前年に、前島潔の周作人印象記や「留日中國學生名簿送付方依頼ノ件」と立て続けに接触していたのであり、「校友」周作人の存在をより強く意識したに違いない。

のちに、大学側は一九四〇年に経済学部を卒業した校友砂田重臣(一九一七—一九九〇)の父親で、当時立憲政友会の議員であった砂田重政(一八八四—一九五七)の協力も得たようである。目下、七理や砂田らと周作人を直接繋ぐ史料は見当たらないが、周作人の教育督弁就任後に北京の「苦住庵」を訪問する日本人がさらに増えた事実を鑑み

ると、七理らも周作人と交流がある仲介人を通じて接触したと考えるのが自然だろう。周作人の立教大学訪問はこうした幾つもの立教関係者の努力や協力のもと実現した。

ところで上住は七理について、「この人は大陸浪人のような人で、中国の人脈を持っていた」と評したが、大学講師の七理がかくも豊富な中国人脈を有していたのはなぜだろうか。

七理の経歴を見てみよう。⁽²⁷⁾七理は小学校や中学校の漢文教師をしていた時分に家督を継いでほどなく、一九一六年に初めて北京など中国各地を遊学してから、毎年中国に赴いて現地の民謡を収集するようになったという。一九三八年に明治書院から出版された『支那民謡とその國民性』はその成果であろう。同書は、七理が自ら収集した約二万首余りの中国各地の民謡のなから佳作を約二九〇首選び、それらを省ごとに掲載する。「予はこの民謡を文學として、又、支那國民性把握の一觀點として見る」(「凡例」)と説く七理は、中国人留学生とも積極的に交流をはかり、一九一九年には「留學生の会」(のちに「中日親和会」と改称)を設立、同会の会長を一九六五年まで務めた。「相互尊敬、相互親愛、相互理解」(「中日親和会趣旨」)を基礎に、幾度も中国渡航や中国人留学生との交流を通じて、七理は幅広い中国人ネットワークを築いたのだった。先の上住の七理に対する評価もある程度当を得ていたと言え

る。他方、日本では数々の大学をわたり歩くなど不明な部分も少なくないが、その中国への深い愛着は生涯変わらなかったようだ。

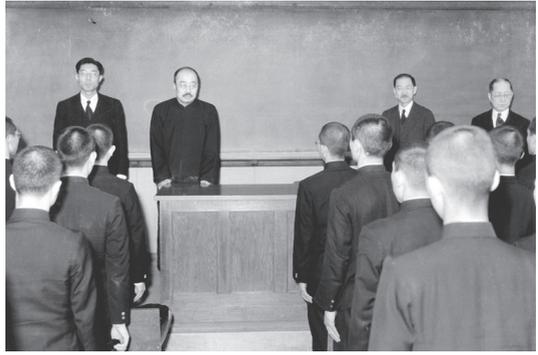
当時、周作人と七理がどのように交流をはかったのか、日記が全て公開されていない現在のところ詳細を知る術はない。しかし両者は民俗に強い関心を寄せた点で接近しており、共通の話題が民俗であったとしても不思議ではない。⁽²⁸⁾

四 「公/私」の交錯

——三一教室での講演と突撃インタビュー——

学内参観を一通り終えた後、周作人は三一教室で約二〇〇名の学生代表を前に中国語で講演を行った。今のところ講演の口述記録は見当たらないが、前出の『学報』の記事にその概要が掲載されているのでこれを参照してみよう。⁽²⁹⁾紙幅の関係もあるため、ここではその要点のみを挙げる。(1)築地と池袋校舎の変遷と新校舎にみる発展に対する称賛、(2)「現在東亞のために抱く信念は立教在學時代の恩師より受けた教育の賜物」である、(3)「今後共日支は固い握手をもつて平和將來のために努力したい」、以上三つである。

(1)、(2)は自身の留学体験を契機とする、東京への憧憬の念が立教大学のもとに表れたことばと理解できよう。大学



周作人の講演の様子（「其二」より）

（右から学長、予科長、周氏、通訳）



「学長ノ紹介」（「其二」より）

けなので、その内容に彼らの意向や配慮が影響している可能性もある。いずれも原文を見ない限り想像の域を出ないためこれ以上の言及は差し控えるが、(3)も同様に時局に沿った発言であった可能性が高い。翌年にも周作人は新聞のインタビュールに於いて、「日華文化の提携については東亞文化の根底は一つであり、東亞民族の運命は一つであるといふことを私は確信してゐる。教育の根本もここにあると思ふ」と述べている。時局に沿いつつも、具体性に欠ける漠然とした意気込みは、彼の政治性の欠如を象徴していないだろうか。

上に見てきた通り、講演からは校友、

での学生を対象とする講演として無難な内容と言える。ただし(2)の「東亞のために抱く信念」と「立教在學時代の恩師から受けた教育」を関連づけるのは論理的に少々無理がある。明治末期の立教大学予科での二年間の留学中、ここで周作人が学んだのはギリシャ語だけである。時局と講演場所に配慮した結果、周作人はこのようなこじつけにも似た話をしたのではなからうか。そもそも講演内容を記載した『学報』の記事自体、学生記者や通訳者を介しているわ

教育督弁としての周作人の姿が浮かんでくる。講演は周作人に随行した「黄」という姓の青年秘書の通訳を介して中国語で行われた。また周作人が着ている「黒い支那服」とは、すなわち黒い「馬褂」のことで男性の正装である。その内容や形式から公的な講演であったと推察される。しかし実際のところ、公演時に新聞記者は不在であり、会場には立教大学の学生、教職員といった立教関係者のみが集った。周作人の訪問が直前に決定したため、立教大学での講



歓迎茶話会での集合写真（「其四」より）

演開催に関する情報を共有する間が無かったのかもしれない。だがその二日前には帝国ホテルで記者会見も開かれていたのであるから、当時、大学が部外者の入構規制を敷いていた可能性もあるものの詳細は不明である。周作人の三一教室での講演は立教関係者のみが集う、言わば「半公私」の空間で行われたのだった。

ほかにも『学報』をめくると、より閉ざされた空間で周作人が話をしていたことが判明した。総長邸で開催された

歓迎茶話会での歓談

の合間に、『学報』

記者が周作人に突撃インタビューを行っていたのである。

『学報』に周作人のインタビュー内容全文が掲載されているのでこれを参照してみよう。インタビュー記事の冒頭には、講演の要点(1)とほぼ同様の話に続いて、次のような内容が記されている。

中國の學生は近頃は大分落着いて來ました、勉強をするものも出て來ました、然し一體に事變のために元氣がなく研究にも色々制限を受けます、私はもつと中國の學生は元氣を出さねば駄目だと思ひます、學生の文化運動と云つたものは全然無い有様で大學新聞等勿論ありません、文壇も沈滞で新聞の續きものに大衆小説が出てくる程度で文學的な作品は出てゐない様です、凡ての問題は一日も早く事變³²を處理し平和を招來することによつて解決されるのです

学報記者による突撃インタビューを受けた際に発せられたこの言葉は、彼の率直な心情を表すものと判断できよう。「事變」とは、一九三七年七月七日北京郊外で起きた盧溝橋事件のことであり、事件勃発当時、「支那事變」と呼称されたことは知られている。事變の余波が中國の文教界におよぶ現状を、周作人は学生生活や文壇の沈滞を例に挙げ憂懼している。このような想いの背景に、陥落区における日本の文教政策が影を落としていることは言うまでもない。だが上記のような発言に至った直接的な契機は、実際に立教大学の新校舎のほか、『学報』や上住らの「海外事情研究会」³³にみる学生の活発な課外活動を眼にしたからではなかったか。周作人は自身が理想とする文教界の姿を立教大学に重ねたのかもしれない。

ところで、このインタビューの場に通訳者はいたのだろうか。歓迎茶話会の歓談の合間という隙間時間に実施された突撃インタビューであったこと、また総長邸での周作人の歓談写真のいずれにも「黄秘書」の姿はなく、周作人は総長や立教大学関係者と直接歓談していることから、インタビュー記事は周作人自身が直接記者に語ったものである可能性が高い。仮にそれが中国語であったとしても、立教大学には上住のような中国語を操る「支那語」学科の学生もおり、会場の総長邸での写真には確かに学ラン姿の学生が数名写っている。インタビューは完全な公的空間で行われたのではなく、言わば私的な空間で行われたと言える。そこで飛び出した周作人の即興的なことばに、私的な意識に基づく心情を見出すことも可能だろう。

立教大学訪問にみる周作人の諸々の行為からは、「文人督弁」という文学家ないしは政治家としての一面以外に、校友という複数の姿が浮かんでくる。それは周作人の立教大学訪問そのものが、「公」と「私」の間、すなわち両者の交錯のなかで行われたことを示唆する。周作人の訪問時、校友としての言動や対応が多く見られるのは、両者が事前「母校訪問ノ形式ニテ来學」（「其ノ一」の説明文）と申し合わせをしていたからに他ならない。それがどちらからの提案であったかは知るよしもないが、少なくとも周作人の母校に対する親しみや関心というものが存在したはずで

ある。そうでなければ過密スケジュールのただ中、その直前まで時間を調整して立教大学を訪れることはなかっただろう。周作人は立教大学訪問において、「文人督弁」としての面目を保ちつつ、校友としての身分を存分に享受した。

五 流動する「文化」イメージ

淪陥期、周作人は文化をどのように捉えていたのだろうか。「文人督弁」の周作人に期待された「文化」とは政治的文脈におけるものであり、それは周作人の志向する文化とは異なっていたはずである。そのことは前節までに見てきたように、立教大学訪問に際して彼のなかに複数の身分が存在していたことから示唆される。本節では特に立教大学訪問の年に注目して、その前後に見る彼の思想歴の一面を概観する。

「文人督弁」として来日する前年、周作人は中国文学と思想に関する重要な論文四篇を続けざまに発表した。「漢文学の伝統」「中国の思想問題」「中国文学上の二つの思想」「漢文学の前途」がそれである。「事変」以前から「原始儒家」と自称していた周作人は、この四篇において「儒家」式中国の伝統への回帰を唱道した。⁽³⁴⁾

「中国の思想問題」に関しては、一九四三年の大東亜文学者大会で片岡鉄平が同文に端を発して「中国老作家を打

倒せよ」と周作人を批判したのに対し、周作人も反論したこと、また戦後の裁判での答弁において周作人は同文に言及して自己弁護をした経緯があることなどから、従来より注目される文章である⁽³⁶⁾。これまでにも多くの議論がなされているので、ここでは「中国の思想問題」の一部を引用してその概観を窺う。

中国人民の生活の要求は単純であるが、また切実でもある。彼は生存を切望する。彼の生存の道德は人を損ねて己れを利しようとは願わぬが、そうかといって聖人の如く己れを損ねてまでして人を利することはできない。他の宗教的な国民は天国が近づいたと夢想して、永生を求めするために湯火を踏むこともあるが、中国人にそのような信仰心はない。彼は神や道のために犠牲になることを承知しない。だが彼も時に湯火を踏んで辞せぬことはある。もし彼が生存の望みを絶たれたと感じた時には、いわゆる「鋌せられて険に走る、急なれば將た安んぞ扱ばん」〔左伝〕ということになるだろう。(中略) 中国人民は日頃平和を愛好する。それは時にまるで忍耐が過ぎるまでに。だが耐えきれない時がくれば、一変して本来の思想態度を完全に天外に放り投げ、反対に野生を發揮する。そうだからといって、誰をとがめられるだろう⁽³⁷⁾?

「他の宗教的な国民」とは日本人を指している。周作人は日本民族の宗教的信仰ないしはその宗教感情に、中国人との相違点を見出しているのである。これが淪陷区北京で発表されたのであるから、片岡のような日本人が現れるのも頷けよう。「中国の思想問題」において、周作人は日本と中国文化の共通性ではなく、両者の本質に焦点を当てることによって、むしろその異質性を描き出そうとした。

文化の「本質」への注目は、一九三五年から三七年にかけて発表された四篇の日本文化研究論文、所謂「日本管窺」シリーズには見られない。「日本研究屋」と自認した周作人は、シリーズ当初に「寓公」の「追憶と印象の雑談」だと断って、政治や軍事から距離を置いて文化を単独で論じていた。ここでは主に日本と中国文化の共通性について論じられたのである。華北「臨時政府」が成立し、日本帝国主義はますます勢いを増す局面下、周作人は次第に虚無感を深めてゆく。「二国の文化を理解する」ということは、困難はもとより、その上またほんとうに寂しいことである。日頃もつばら往昔の文化に注意を払って、思いを馳せずにいられないものだが、現実には往々にしてそれと異なるどころか、いつそまるつきり反対でさえあって、この時人は矛盾失望を感じる⁽³⁸⁾。自身が体験し、憧憬する明治東京とはほど遠い、反「文化」状態の昭和日本を目にした周作人は異文化理解の限界を感じたのだろう。シリーズ最



総長邸での歓迎茶話会の様子（「其三」より）

（前列右から周作人、遠山校長、七理講師）

意味なのだろうか。「漢文学の伝統」の冒頭には、「漢文学」について次のように説明された箇所がある。

ここで漢文学というのは、普段中国文学と呼ぶものことだが、ここで中国文学を使うのは意味の広すぎるからいがある。この名称に呼びかえた。中国文学には当然中国人の各種の文学活動がすべて含まれるのに対し、漢文学は漢文で書かれたものに限る。これが私の考える区別である。もつとも、外国人の著作は対象としない。中国人はもとより漢族を主流とするが、その中には南蛮北狄（てい）の子も少なくなく、このほかに滿蒙回の各族もあり、これが中国人という団体に加わり、漢文でものを書くこと、おのずと一つの大きな潮流に融け込むことになる。これがすなわち漢文学の伝統であり、今に至るまでこのことに何ら変わりはない。

後の「日本管窺之四」では「日本研究屋」の閉店を宣言した。⁽⁴⁾
以降、淪陷区北京で周作人は翻訳や教学によって日々を凌いでいたが、一九三九年元旦の刺客襲撃事件を契機に、外出する自由も奪われ授業に行くこともかなわなくなつた。彼の執筆量は自然と回復の兆しを見せるのだが、このような北京での「苦住」生活のなかで発表されたのが「漢文学の伝統」を始めとする四篇であった。ここで周作人は「漢」という概念を提出するわけだが、それはどのような

周作人は漢字、漢文、漢文学という伝統的かつ極めて狭い範疇に民族的価値を見出した。言語により自他を明確に区別すると同時に、中国人の民族的価値の確実性を強調して

いる。先述の通り、文化と政治が一体視されていた淪陷区では、文化によって個々人の内面を統制することが志向された。こうした実情をまのあたりにして周作人は中国民族の行く末を案じたのではないだろうか。彼の意識は文化の本質へと向けられ、こうして中国固有の「漢」の概念に考えが及んだ。そこには、日本の介入を必要としない、中国人による自国の近代化という理想が託されていたのかもしれない⁽⁴⁾。このような伝統回帰による再生、そして近代化という構想は、淪陷区における知識人のなかでも周作人に特異なものであった。それは本来的な彼の性分だけではなく、教育督弁就任という彼の身に起こった出来事がその主体性に影響したと考えられる。この意義において、彼の「文化」の変化とはそのまま、時局の政治的要請と私的な意識に基づく心情との間で揺れ動く彼自身を投影していたと言える。「文人督弁」として周作人が日本を公式訪問したのはこのような時期であった。

おわりに

以上、本稿では周作人の立教大学訪問に関する新史料への考察を通じて、淪陷期における彼の複雑な思想や心情に迫ることを試みた。東亜文化協議会評議員、「文人督弁」としての日本訪問中の周作人には複数の身分が重層的に内

在していた。それは状況に応じて彼のなかで交替・表面化を繰り返したわけだが、立教大学訪問時には「校友」としての身分も加わり、さらにそれぞれが交錯をもした。周作人が「第二の故郷」と呼ぶ東京の春の空気は、淪陷区に生きる彼の緊張を解かせたのだろうか。立教大学での写真には、リラックスして遠山校長と談笑する周作人の姿がある（本篇末尾写真参照）。

一九四一年四月二日晩、約二週間の日本訪問を終えた評議員一行は北京に戻ってきた。その四日後に周作人は旧体詩の体裁をとる「打油詩」（戯れ歌の意）を作っている。一、二、四句で脚韻を踏むその詩は、周作人の生前未発表の『苦茶庵打油詩補遺』七言絶句二〇首中の「其六」である⁽⁴⁾。

春光如夢復如煙⁽⁴⁾ 春光夢の如く復た煙の如し
人事匆匆又一年 人事匆匆又た一年

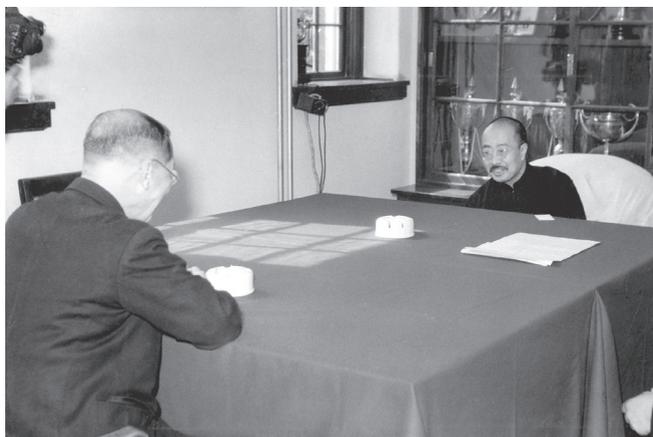
走馬看花花已老⁽⁴⁾ 馬を走らせ花を看んとするも花已に老ゆ
斜陽滿地草芊芊⁽⁴⁾ 斜陽地に滿ち草芊芊

周作人は春の光景に日本訪問の際の見聞や所感を重ねたのであろう。彼にとつて、四月の日本再訪は短く儂い出来事であった。日々刻々と時局が変化するなか、「文人督弁」の彼は桜咲く日本で「走馬看花」をしたわけが、ふと気づ

くと花はすでに色褪せ、夕日が青々と繁る草を照らしていた。晩春から初夏に移行しようという北京で、周作人は夢から覚めて現実を目にしたのである。そこには過ぎ去った日本滞在を惜しむ彼の姿が浮かんでくる。周作人がこの詩に託したのは日本への憧憬の念である。それは心象風景となり、現実の時節の風物と詩中で結合された。

他方、この詩は諷刺を含んでいる。「走馬看花」は唐の孟郊が科挙登第後、得意になって長安で馬を走らせて花見をしたという故事を踏まえている。評議員としての会議出席のほか、教育督弁として日本人官吏らに挨拶回りをし、周作人は日本で見事官僚としての任務を果たした。学士会館での湯爾和追悼会では弔辞をささげ、湯の閣僚就任に対してしばしば敬慕した、とも述べている。公式の場での政治的な挨拶を周作人の本心と見なすのは早計だろうが、そこには彼なりの自負のようなものも見え隠れする。だが詩から窺える彼の様子はかえって意のままにならず、些か不如意である。ここからは周作人の悲哀を見出せまいか。時間人は人待つことなく流れてゆき、世の中の万物は自然の法則に従って育まれ衰微する。花が色褪せる一方、草が繁るという隆替にみる対照は、人の世の一盛一衰を象徴している。周作人は「花」に自らのかりそめの身分を暗示させたのかも知れない。少なくとも彼はこの盛衰を快く見ておらず、自虐的に皮肉っている。

淪陷区北京で偽職に就いた周作人は「沈黙」を選択した。それは日本帝国主義によりもたらされたといっても過言ではない。だがその就任当時、彼ほどの博識な人物がその決断の重大さをどれほど認識していたかと言えば疑問である。来日時における重層的な身分の往還、とりわけ立教大学訪問時にみる「公／私」の交錯から、その主体性の「揺らぎ」を見出すことも可能だろう。そしてそれは当時、彼の意識が文化の本質という、より一層内側へと向いていたことと根底で繋がっていたと言える。「対日協力」に踏み込んだ彼の覚悟が不透明な理由をここにみて取れるように思う。木山は、「大東亜共栄」の高唱に「東洋人の悲哀」で和するような皮肉は、彼の「協力」の言辞にさえ溢れていたにちがいない」と指摘する。周作人という人は本質的に皮肉屋の文人であった。その彼が非日常極まる北京において、「沈黙」のただ中、打油詩に私的な意識にもとづく心情を込めたのは言わば必然だったのではなからうか。淪陷期全体を通じた周作人の打油詩についての考察は今後の課題としたい。



「學長ト歡談」(「其三」より)(上) 「學長室ニ於ケル周作人氏」(「其ノ一」より)(下)

注

〈1〉「第一回周作人国際シンポジウム」は二〇一八年七月七、八日に早稲田大学で開催された。本稿は当該周作人シンポジウムおよび「中国近代の知識経験及び文学をめぐって」国際ワークショップ（愛知大学、二〇一八年七月一日）で行った口頭発表と会議用論文に大幅な修正を加えて日本語にしたものである。なお、中国語論文も近日刊行予定である。

〈2〉例えば、銭理群『周作人伝』（上海人民出版社、一九九一年）、張菊香・張鉄榮『周作人年譜』（天津人民出版社、二〇〇〇年）など。

〈3〉葎堂「読『東山談苑』」一九三八年二月二〇日作、『晨报』一九三八年六月二四日。『周作人散文全集』第一三卷、広西師範大学出版社、二〇〇九年、四九頁。本稿で「俗」に「やば」のルビをふるのは、周作人が武者小路実篤との公開往復書簡（『読売新聞』一九四一年六月二一日）のなかで、この一文に言及して「俗」を「野暮のこと」と説明していることに基づく。周作人は一九四三年の「弁解」と題する文章の中でも同文を含む全文を再録している。以上、木山英雄『周作人「対日協力」の顛末補注』『北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店、二〇〇四年、八五―八六頁。以下本稿の日本語訳は拙訳による。

〈4〉木山英雄『周作人「対日協力」の顛末補注』『北京苦住庵記』ならびに後日編』同前。

〈5〉新史料発見の経緯について些か記しておきたい。二〇一七年初冬、筆者が立教大学で開催された国際シンポジウム（『百年風華——華文文學與文化』）で報告を行った際、同席された鈴木勇一郎氏（立教学院史資料センター）の報告のなかで、周作人の立教大学訪問時の二、三枚の古い写真が提示された。これに俄然興味を持った筆者は、鈴木氏ならびに宮川英一氏（立教学院史資料センター）の全面的な協力のもと、立教大学での調査を開始し、幸いにも新たに写真を含む数点の史料発見に至った。ほかに『立教学院学報』等についても多くの教示を賜った。両氏に深く感謝申し上げます。

〈6〉方紀生「周先生の点点滴滴」『大陸』一九四一年五月号、改造社初出。方紀生編『周作人先生のこと』光風館、一九四四年、二二―一頁。

〈7〉一九四一年の周作人日記は現在公開されていない。本稿のもとになる口頭発表を周作人国際シンポジウムで筆者が行った際、ある中国研究者からごく一部ながらも日本滞在中の周作人日記に関する史料の提供を受けた。周作人日記は魯迅博物館で全文を見られた時期があったという。この旅程表は今回入手した当該史料も参照して作成した。

〈8〉同書については、川辺比奈・鳥谷まゆみ「方紀生のこと——『周作人先生のこと』編集と日中文化交流に捧げたその生涯」（中国文芸研究会編『野草』第九八号「周作人特輯号」、二〇一六年一〇月、六四―一〇二頁）を参照されたい。

〈9〉 白井亨「雅俗両道——教育總署の周先生」(初出不詳)、『周作人先生のこと』前掲、一五四頁。

〈10〉 加藤将之「督辦としての周先生」『周作人先生のこと』同前、一四七頁参照。同文は「華北の風物文化」(山雅房、一九四三年)所収の二篇、「華北教育事情と興亜讀本」(「華北の役所風景」)をもとに同書のために書き下ろした文章と思われる。

〈11〉 加藤将之「督辦としての周先生」前掲、一四八頁。

〈12〉 川島真「華北における「文化」政策と日本の位相」平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』東洋文庫、二〇〇七年、六一―八五頁。当時、周作人も「日華文化の提携」について日本語で語っている。「中國文學の動向——日華文化の提携について(上)」『文化の根底は——日華文化の提携について(下)』『朝日新聞』東京版、一九四二年三月一八日、一九日。二篇はのちに一篇に統一編集され、「日華文化の提携と中國文學の動向」と題を変更して、『周作人先生のこと』(前掲、二四三―二四六頁)に収録されている。淪陷区における文教政策については、興亜院北支連絡部「北支に於ける文教の現状」(興亜院北支連絡部発行、一九四一年)、朝比奈策太郎「北支に於ける文教問題」(三秀社、一九四一年)を参照できる。そのほかの先行研究に、小野美里『日中戦争期華北占領地における文教政策の展開——「事変」下占領地の「内面指導」』(首都大学東京博士学位論文、二〇一五年)がある。

〈13〉 「82 学希腊文」『知堂回想録』、『周作人散文全集』第

一三卷、前掲、三八四―三八六頁。

〈14〉 代表的な先行研究に、根岸宗一郎「周作人とH・S・タッカー——立教大学におけるギリシア語学習とギリシア文学・キリスト教との出会い」(『中国研究月報』第五五卷四号、二〇〇一年、二〇―二九頁)、波多野真矢「周作人と立教大学」(『魯迅研究月刊』二〇〇一年第二期、四一―四五頁)がある。

〈15〉 「ようこそ先輩 周作人氏本學來訪」『立教学院学报』第七卷七号、一九四一年五月六日。

〈16〉 奈須恵子・永井均等編『遠山郁三日誌 一九四〇―一九四三年』山川出版社、二〇一三年、一一八―一九頁。遠山郁三(一八七七一―一九五一)は日本の皮膚科学者、東北大教授、東京大学教授を歴任した後、一九三七年四月から一九四二年二月にかけて立教大学の校長を務めた。海老沢有道編『立教学院百年史』立教学院、一九七四年参照。

〈17〉 発見した写真は「其ノ一」から「其四」まで分類されて一冊のアルバムに貼られている。それぞれの見出しは次の通り。「其ノ一」昭和十六年四月十六日 華北政務委員會教育總署督辦校友周作人氏 母校訪問ノ形式デ來校(計二枚)、「其ノ二」豫科第三二一番教室 周氏ノ講演(計三枚)、「其ノ三」總長記念館芝生ニテ(計二枚)、「其四」タイトル無し(計二枚)、以上九枚である。

〈18〉 『遠山郁三日誌 一九四〇―一九四三年』前掲、一一七頁。

〈19〉 『周作人日記下』(大象出版社、一九九八年、六四九

頁)、「周作人一九三九年日記」(『中国現代文学研究叢刊』二〇一六年第一期、二九頁) および前島潔「周作人氏に會ふの記」(『立教学院学報』第六卷一号「随筆」欄、一九四〇年一月二八日) 参照。前島の回想によれば、一九三九年夏、前島が中国に視察旅行に行った際、北京の崇真学園を訪問し、そこで園長清水安三の薦めで立教校友の周作人を訪問したという。

〈20〉 校友上住昇平は一九一九年大阪生まれ。父の仕事のため「奉天」に移住、のちに上海に移り、小学二年の時神戸に戻る。中学二年の時再び父の仕事のため旅順中学に編入、のちに「大連高商」に一年通う。一九三八年立教大学予科商科に入学、一九四四年本科経済学部を卒業。卒業間近の一九四三年九月「海軍予備生」として旅順に派遣された。

以上、永井均インタビュ、山中一弘編「インタビュ」学生生活と戦争 上住昇平さん(昭一九卒)に聞く』『立教学院史研究』第四号、二〇〇六年、一二六一—一四九頁。

〈21〉 予科に属す支那語学科は一九三八年、ドイツ語学科、フランス語学科につづいて三つ目の学科として設置された。当初の学生数は三八名であった。

〈22〉 『立教学院学報』第五卷秋季号(一九三九年一月三日) 〇日「校報／大学部／辞令」、「新任教職員住所」(一覽)に七理・陳両名の氏名、住所を確認できる。

〈23〉 「留日中國學生名簿送付方依頼ノ件」一九四〇年一月二〇日、「支那派遣軍總參謀長板垣征四郎」発行。一九四〇年前後、日本全国の高等学校において外務省文化事業部

が留学生在籍状況の調査を行っている(例えば、「満州國並支那留学生在籍者ニ関スル件」外務省文化事業部長三谷隆信発行)。しかし立教大学には特に支那派遣軍から調査依頼が出された。

〈24〉 「留日中國學生名簿送付方依頼ノ件回答」一九四〇年一月二十九日、「立教大學長遠山郁三」発行。当該回答書には「在學生ニハ該當者無之候」という追記がある。

〈25〉 周作人の成績表は現在公開されていない。本稿では前掲波多野論文の掲載画像を参照した。

〈26〉 永井均インタビュ、山中一弘編「インタビュ」学生生活と戦争 上住昇平さん(昭一九卒)に聞く「前掲、一四一頁。

〈27〉 中井寿孝編『歌碑建立記念 文学と中日親善に生きた七理重恵先生をたたえて』七理重恵先生顕彰会柴田修吉発行、一九八三年。七理については、兵庫県新温泉町のHPに七理の紹介文と写真が掲載されている。先行研究に、中村みどり「七理重恵と中国民謡——『同仁』を中心に」『七理重恵と中国民謡(続)』(『中国民謡通信』第八九号、二〇〇九年、二一〇頁、第九九号、二〇一一年、二一八頁)がある。中村は七理が「東亜研究会」(一九二五年設立)、「中国文学研究会」(一九三四年設立)と直接関わりを持ったことを指摘している。七理が一九四〇年前後に発表した「東亜文化研究講座」叢書の著作はいずれも東亜研究会からの出版である。なお、『中国文学月報』第一四号(一九三六年)の「会員録四月一〇日現在」および第一九

号（一九三六年）「会員移動」の項目に七理の名がある。

さらに第五回例会（第三号、一九三五年「会報」、第二回座談会（第四号、一九三五年「会報」）の参会者名簿にもその名を確認できる。

〈28〉七理収集の民謡には、日本から中国に伝わった民謡のほか、書物の民謡も含んでいる。また「自序」によれば、本来鍾敬文が同書のために長編の序文を用意していたが、紙幅の制限があるため割愛したという。同書の表紙絵は上海の画家王廷珩の作である。以上、七理重恵『支那民謡とその國民性』明治書院、一九三八年。

〈29〉七理は外務省から二回の研究補助を受けて中国での民謡収集調査を実施している（昭和一〇年、一三年）。「目的」漢文学研究ノ為メ、主トシテ、中部南部支那ニ於ケル民謡里謡ヲ採集シ、コレガ詩経トノ關係ヲ開明シ、併セテ民俗学的考察ト社会学的研究ヲ加ヘ、漢文学ニ於ケル其地位ヲ判定セントス（昭和二〇年六月分）。以上アジア歴史資料センター所蔵『本邦人滿支視察旅行關係雜件／補助実施關係』第十卷参照。周作人の民俗に関する先行研究に、子安加余子「日本占領下北京における周作人——「対日協力」と民俗を語ること」（斎藤道彦編『中国への多角的アプローチⅢ』中央大学出版社、二〇一四年、二三三―二四八頁）がある。

〈30〉「ようこそ先輩 周作人氏本學來訪」前掲、および「周作人氏母校立教大學を訪問す」『基督教週報』第八一巻一六号、一九四一年四月二五日。

〈31〉「中國文學の動向——日華文化の提携について（上）」

「文化の根底は——日華文化の提携について（下）」『朝日新聞』東京版一九四二年三月一八日、一九日。原文は日本語である。のちに方紀生はこの二篇を一篇に編集して、「日華文化の提携と中國文學の動向」と題名を変更したのち、同文を自身が編集した『周作人先生のこと』（前掲、二四四頁）に収録した。

〈32〉「ようこそ先輩 周作人氏本學來訪」前掲。

〈33〉これよりひと月ほど前、周作人は日本側漢字新聞記者のインタビュウに対して、「中国全体の教育問題などは、今は国内情勢も御存知の通りで、とても語る段階ではありません」と答えたことがある。秀華「周作人先生訪問記」『華文大阪毎日』一九四一年三月二五日。さらに同年二月一日には「偽」北京大學文學院で「国文教員の資格」と題して同じく学生を前に行った講演を行っている。知堂「怎樣研究中国文學」一九四一年二月一日刊『中国文芸』第三卷六期。『周作人散文全集』第八卷、広西師範大学出版社、二〇〇九年、五五三―五五七頁。

〈34〉四篇の初出は次の通り。知堂「漢文学的伝統」（一九四〇年三月二七日作、一九四〇年五月一日『中国文芸』第一卷三期）、知堂「中国的思想問題」（一九四二年一月一八日作、一九四三年一月『中和月刊』第四卷一期）、周作人「中国文學上の兩種思想」（一九四三年四月一三日南京中央大學講演、一九四三年七月『芸文雜誌』第一卷二期）、葯堂「漢文学的前途」（一九四三年七月二〇日作、一九四

三年九月『芸文雜誌』第一卷三期。

〈35〉「180『反動老作家』」二「知堂回想録」。『周作人散文全集』第一三卷、前掲、七六六頁。周作人は「中国文学と思想に関して書いた文章のうち比較的重要な四篇」と述べている。「179『反動老作家』」二「知堂回想録」。『周作人散文全集』第一三卷、前掲、七六二頁。

〈36〉益井康一『裁かれる汪政権——中国漢奸裁判秘録』植村書店、一九四八年。原文未見。本稿では木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（前掲、二九四頁）を参照した。

〈37〉知堂「中国的思想問題」（初出前掲）、『周作人散文全集』第八卷、前掲、七二一—七二三頁。

〈38〉知堂「日本管窺」一九三五年五月一三日刊『国聞週報』第一二卷一八期。『周作人散文全集』第六卷、広西師範大学出版社、二〇〇九年、五八九頁。および知堂「日本管窺之二」一九三五年六月二四日刊『国聞週報』一二卷二四期。『周作人散文全集』第六卷、同前、六六六頁。

〈39〉知堂「日本管窺之三」一九三五年一月一日刊『国聞週報』第一三卷一期。『周作人散文全集』第七卷、広西師範大学出版社、二〇〇九年、一六頁。木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』前掲、一九三頁。

〈40〉知堂「日本管窺之四」一九三七年六月二八日『国聞週報』第一四卷二五期。そのほか「174 日本管窺」『知堂回想録』参照。

〈41〉知堂「漢文学的伝統」（一九四〇年三月二七日作、一九四〇年五月一日『中国文芸』第二卷三期）。『周作人散文

全集』第八卷、前掲、四〇七頁。

〈42〉木山は「復古による再生という構想に託された中国目前による近代化の理想が、彼をここまで導いた」と指摘する。木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』前掲、二〇〇頁。

〈43〉周作人が日中戦争勃発後の一九三七年から一九四五間の間に作った打油詩は計四四首あり、そのうち『苦茶庵打油詩』に二四首（のちに「立春以前」収録）、『苦茶庵打油詩補遺』に二〇首が収録された。

〈44〉李白「春夜桃李園に宴するの序」に「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢のごとし。歡を為すこと幾何ぞ」とあり李白の詩を襲っている。

〈45〉王仲三箋注『周作人詩全編箋注』学林出版社、一九九五年、三三頁。

〈46〉姜徳明「周作人談湯爾和——關於周作人的兩篇佚文」同前、四一—四三頁。

〈47〉彼はのちに教育督弁を務めた二年間を回想して、「芝居をした二年間」が道化役者のようであったと述べている。黄裳「老虎橋邊看」知堂「『文匯報』一九四六年九月二日。黄喬生・孫郁編『回望周作人 国難声中』河南大学出版社、二〇〇四年、二七〇頁。

〈48〉木山英雄「周作人と日本」一九七三年七月。木山英雄訳『日本談義集』東洋文庫、二〇〇二年、三八四頁。

〈49〉「178 従不説話到説話」『知堂回想録』。『周作人散文全集』第一三卷、前掲、七五五頁。